

Domのイケメン調教師による淫乱Sub調教

「初めてのプレイでお利口なSubになるまで、クリ責め玩具調教されました」

「Sub性の欲求不満からくる体調不良ですね」

一週間前から続いている謎の倦怠感と疲労感。風邪を拗らせてしまったと思いつ診した私に下されたのは、到底理解できない診断結果だった。

「あの…何かの間違いではないのでは？ 私はノーマルですけど」

「稀に成人してから、第二次性が変化される方もいるんですよ。まあ、簡単に言うと、突然変異みたいなものです。ひとまず、薬を処方しておき

ますので、それを毎日飲んでください」

「はい…」

「ですが、抑制剤は副作用も多いので、落ち着いたら、プレイを行える相手を見つけた方がいいですよ。第二次性の相談窓口などもありますので、利用してみてください」

そう言って、一冊の本を渡された。表紙に書かれた「心身を守る Dom/Sub のプレイについて」というタイトルを見て、思わずため息が漏れた。

帰宅後、いちよう中身に目を通したが、正直今までノーマルで生きてきた自分には、馴染みのないことばかりで、ただただ戸惑うばかりだった。

いきなり、Subと言われても、支配されたいとか命令されたいという

欲求は湧いてこない。Domが身近にいないため、当たり前なのだが、自分の奥底にそんな本能が眠っているとほんとにも思えなかった。

## 第一話

あれから一か月ほどが過ぎた。

最初の一週間は真面目に抑制剤を飲んでしたが、副作用がキツくて、仕事にまで支障が出ていたので、飲むのをやめてしまった。

多少の倦怠感は拭えないが、それでも普通に過ごしていた時、同僚に飲み誘われた。体調的にお酒は控えた方がいいと分かっていたが、もやもやする気持ちを発散させたくて、つい参加してしまった。

華の金曜日。同じ部署の同僚たちとの飲み会。

いつもなら、楽しく飲んで二次会まで行くところだが、今日は全くその気分にはなれなかった。

乾杯から三十分経ったにもかかわらず、ジョッキのビールは半分しか減らず、そのわりにやけに酒が回り、気持ち悪さが込み上げてくる。

「大丈夫？」

様子のおかしい私をみて、隣に座っていた友人が心配そうに声をかけてくれた。

「ごめん…ちょっと気分悪くて」

「え、もう酔ったの？」

「いや、実はちょっと体調悪くて…ごめん、今日はもう帰るね」

「大丈夫？ 送るよ」

「平気だよ…楽しんで、じゃあ」

心配する同僚たちにぎこちない笑顔を向けて、居酒屋を出る。夜風に当たっても、気分は晴れない。

このまま電車に乗ったら、吐いちゃうかも。とりあえず休憩しよう。倦怠感と未知の焦燥感が、体の奥底に渦巻いていた。重い体を引きずるようにして、人気のない公園にやってくる。

ベンチを探して辺りを見回していた時、後ろから声をかけられた。

「大丈夫？」

「え？」

そこにいたのは、居酒屋で目の前に座っていた先輩だった。

「だ、大丈夫です。すみません、一時間も経ってないのに雰囲気悪くしちゃいますよね。来る前から、ちよつとしんどかったんですけど…で、でも一人で帰れますから」

心配そうな顔をする先輩には申し訳ないけれど、今はひとりになった。なるべく明るい声で返事をするが、先輩の顔色は晴れない。

「こっちは別に大丈夫だよ。だけど、君のことが心配で。ふらふらしてたから、どっかで倒れてるんじゃないかと思って」

「わざわざすみません…だ、大丈夫ですよ」

「大丈夫には見えないよ。今にも倒れそうだ」

そう言って、先輩は強引に私の腕をつかんだ。

「ツ：ほ、ほんとに大丈夫ですって…」

その距離感と先輩の声色がやけに怖くて、私は腕を引くが、握る力はますます強くなる。

「大丈夫じゃないって」

「や、ほんとに、大丈夫なんで…」

「顔も赤いよ？」

「ツ：！！」

そう言っつて、先輩が私の頬に手を添えた瞬間、ぞわぞわと体感したことのない嫌悪感が足の先から、脳天までを駆け抜けていった。

「やツ：離して！」

思わず、手を払うと先輩の目つきが変わる。

「ucci…優しくしてやろうと思ってたのに、調子乗りやがって」

「え…?」

『<sup>Kneel</sup> 跪け』

冷淡に放たれた一言が私の神経を麻痺させる。膝に力が入らなくなつて、崩れるようにその場にへたり込んだ。

「な、なに…」

痺れたように体は動かなくなり、恐怖で肩が震える。見上げる私を見て、先輩の口角が上がった。

「お前、やっぱりSubだったんだな」

「え…」

なんで、それを知っているのか。その疑問は言葉にならない。

先輩は膝を曲げて、しゃがみ込むと、私の顔を下から掴んだ。

「Dom性をノーマルに騙せても、Domには騙せない：お前もSubなら知ってるだろ？」

そんなこと知らない。

「いやあ：でも、最近まで気が付かなかったよ。お前がSubなんて。そんな素振りも心配もなかった」

当たり前でしょ。この間まで、私はノーマルだったんだから。

頭では言葉を返せても、何一つ喉が動かない。

「それが、一か月くらい前から急に様子がおかしくなってさあ。まったく、欲求不満なのが駄々洩れな顔で、うろちよろしやがって。何回、職場で襲ってやろうかと思ったか：！」

顔をぐっと掴まれ、引っ張られた。鼻先が当たりそうなほど、互いの距離が近くなる。

「や…」

絞りだした声は、自分のものとは思えないほどか細いものだった。

「パートナーに捨てられたのか？ そんな状態じゃ、ほんとに体壊すぞ…だから、俺がお前の欲求不満を解消してやるよ」

「なっ…」

何を言っているの。言葉の意味を理解できない私を、よそに先輩はこう言い放った。

『脱げ』

「ッ…！」

その声は、脳に直接響くようだった。先輩が纏う空気が変わり、凄まじい威圧感が私の肌を突き刺してくる。

恐怖で心は震えているのに、頭は放たれた言葉に支配されて、そのことしか考えられない。

気がつけば、小刻みに震える指先はシャツのボタンに外し始めていた。

「や…」

嫌だ、嫌だ、嫌だ、嫌だ……！！

「や、だ…」

ボタンにかかった指先が止まる。

「誰が止まっていいって言った？ 『脱げ』」

「ッ…！！」

威圧感が増し、全身が震える。目の前の男から放たれる空気と言葉は、まるで槍のように私の心と体を突き刺した。

「や、あ…う、あ…ッ」

苦しい、息がうまく吸い込めない…。

怖い、怖い…誰か、助けて…！

「その子から離れろ！」

見知らぬ声が響いた瞬間、威圧感は消えていく。声の主は、先輩を押しつけて、私の肩を支えた。

「てめ、誰だ！ 関係ないやつは引っ込んでろ！」

いきなりの登場に、先輩が怒りの声をあげるが、彼は全く相手にせず、優しい声で声をかけてくれる。

「大丈夫、大丈夫。ゆっくり息を吐いて…」

穏やかな声に合わせて息を吐こうとするが、極度の緊張状態だった体はうまく言うことを聞かない。

「まずいな…完全にサブドロップになってる」

「おい、何なんだよ、お前。俺のSubに勝手に触れてんじゃねえよ！」  
除け者にされた先輩が叫ぶ。

「俺のSub？ ふざけるなよ、この子がどういう状態かわかって言ってるのか」

「だから、お前には関係ないっ…」

「さっさと消えろ。これ以上喚くと、警察呼ぶぞ」

「っち…何なんだよ！」

駆け出していく先輩の足音がどこか遠くに聞こえる。何か、言い合いをしていたようだが、その声すら、自分の乱れた呼吸の音でかき消されていた。

「落ち着いて…大丈夫だから、俺の目を見てごらん…『Look』」

その声に促されるまま、顔を上げる。涙で歪んだ視界のさき、綺麗な彼の瞳があった。

「そう…」

「あ…」

「そのまま、ゆっくりと息を吐いてごらん…」

「ふ、はあ…」

固まっていた体が、彼の声で解れていく。新鮮な空気が鼻腔を抜けてい

き、呼吸が落ち着いてくる。

「ふう…はあ…ふ…」

「そう、上手…『Goodlady』」

彼は微笑みながら、頭をそつと撫でてくれた。その瞬間、お腹の底からぶわつと安心感が湧き上がってくる。さっきまでの、緊張感は消え去り、気分が悪さも嘘のように消えていく。

「ああ…な、んで」

何なんだろう、この感覚。

ずっと続いていた不調さえも、消えた気がした。

「あなたは、いったい…」

「俺はこういうものだよ」

そう言って差し出された名刺にはこう書かれていた

「専用ホスピタルエステ 調教師 倉間 想…?」

聞き馴染みのない単語の羅列に、首を傾げた。

調教師？ 物騒な響きだが、目の前の彼からはそんなイメージは連想で  
きない。

「あの…」

「とりあえず、座ろうか。水買ってくるね」

そう言って、私をベンチに促すと、倉間さんは自販機に向かった。一人  
残されたベンチで、手元の名刺に視線を落とす。

ホスピタルエステってなんだろう。しかもSub専用って。もしかして、  
あの人もノーマルじゃない第二次性を持つってことかな。

「お待たせ。はい、ゆっくり飲んでね」

言われた通り、ゆっくりと喉へ流し込むと、ふっと肩の力が抜けた。私が落ち着くのを待ってから、倉間さんは少し遠慮がちに口を開いた。

「サブドロップになってみたいけど、大丈夫？ あの男はパートナーじゃないよね」

「え、えつと…サブドロップってなんですか？」

「え、知らないのかい？」

「実は…私、Subになったばかりなんです…」

見ず知らずの人に話すことではないと思いますが、彼の柔和で穏やかな雰囲気な気持ちに緩んで、ついことの顛末を話してしまった。

「…と、いうわけで、何が起きたのかよくわからなくて…でも、あれが

Domのコマンドだったんですね。知識としては知ってましたけど、いざやられると怖かったです…。Subの人って、あんな怖いことを耐えないといけないんですか？」

「それは違う！」

「え…」

「違うよ。本来プレイは第二次性の欲求を満たして、Dom、Subが互いに満たされる行為なんだ。だからこそ、信頼関係が大事で、Domが強引にSubを支配することは絶対にしてはいけない。強行的なコマンドやグレアは、サブドロップを引き起こして、Subの心身に大きなダメージをもたらす」

「サブドロップ…？」

「さっき、あの男にコマンドを出された時、気分が悪くなって過呼吸状態になってたよね。あんな状態のことをサブドロップって言って、すごく危険な行為なんだ」

「…あの、DomはSubのことがすぐにわかるんですか？」

「大体はわかるよ。でも、パートナーがいて、精神が安定していたり、抑制剤を飲んでる場合は、わからないことも多い。まあ、人によるけどね」

「だから…先輩は…」

「私は己の無知と危機管理能力の低さに辟易して、肩を落とした。」

「抑制剤、飲まなかったんだね」

「はい…副作用がキツくて、ついやめちゃったんです。ほんと馬鹿ですよ。ね。自業自得です」

「そんなことないよ。抑制剤で悩んでいるSubは多い。副作用がきつし、自分に合うものを見つけないのが難しいからね。急にSubになった君なら、尚更だよ」

「詳しいんですね。それって、この職業とやっぱり関係が？」  
名刺を掲げて尋ねると、倉間さんが頷いた。

「うん。俺はプロのSub専用調教師だからね。第二次性のことは、専門医レベルで詳しいよ。」

「その、なんなんですか。調教師って。それに、ホスピタルエステっていうのも」

「そうだね。特定のパートナーがない。プレイがうまくできない。抑制剤が合わなくて精神が不安定になっている。そんな悩みを持つ人たちと

プレイをして、欲求不満を解消、健康状態を改善させるのが調教師の仕事。そんな調教師が働いているのがホスピタルエステだよ」

倉間さんの説明を聞いて、サブドロップに陥っていた時のことを思い出す。

「そっか…じゃあ、倉間さんの言葉もコマンドだったんですね」

「そう。本当は、もっとルールを決めてプレイを行わないといけないんだけど。ちょっと緊急だったから。ごめんね、何か不調とかないかい？」

「いえ、そんな！むしろ、倉間さんのコマンドは、何というかすごく安心しました」

「よかった。もしかしたら、すごく相性もいいのかもね」

そうなのだろうか。よくわからなくて首を傾げると、倉間さんはふっと笑

った。

「ねえ、Subのことやプレイのこと、もつとちゃんと知りたくない？」

「…し、知りたいです」

ちゃんと自分で自分の体を理解したい。

「じゃあ明日、十九時にここで待ってる」

倉間さんは私が持っている名刺を指差した。そこには、彼の名前とともに、店の名前が書かれていた。ドキドキと鼓動が速くなる。

倉間さんは私の耳元に口を寄せると、艶のある声で囁いた。

「俺なら、君の体も心も全部満たしてあげられるよ…」

「はい…」

『Good lady…♡』

## 第二話

翌日、私は名刺に書かれたお店に向かった。

そこは、繁華街で賑わう大通りから一本、路地裏に入った所にあった。

暗いわけではないが、煌びやかなネオンはなく、立ち並ぶ店も落ちついた  
雰囲気のバーや、レストランが多い。

そんな通りの綺麗なテナントビルが、名刺に書かれた住所だった。緊張  
した面持ちで、入口を探していると、一階のバーの扉の反対に、地下へ続  
く階段があった。

看板も何もなく不安だが、私は覚悟を決めて階段を下った。降りると、  
廊下に右に続いていた。薄暗いその廊下には、ポスターの一枚すら貼られ

ておらず、なんだか現実味の無い空間に感じる。

緊張したまま、廊下を歩ききるとエレベーターが現れる。ボタンは上へのマークしかない。

これを押したら、もう引き返せない。私はゆっくり深呼吸して、気持ちを整えると、緊張しながらそのボタンを押した。

すぐに扉が開き、中へと誘われる。中には開閉ボタンのみで、階数が書かれたものは何一つなかった。閉めるボタンを押すと、扉が閉まりエレベーターは上っていく。

エレベーターの扉が開くと、そこには倉間さんが笑顔で立っていた。

「お待ちしてりました」

「ど、どうも…」

昨日会ったときは私服だったが、今は白のスクラブを着ており、見た目はまさにマツサージ師のようだった。

落ち着いた間接照明が照らす受付で簡単な手続きをすると、奥の部屋に案内された。

いくつか扉があったが、他の人の姿を見ることはなかった。

無言で倉間さんについていくと、一番奥の部屋に案内される。中に入ると、まるでホテルの一室のような空間が広がっていた。

大きなベッドにオシャレなローテーブル。ベッドと向かい合って置かれている革張りのソファは、嫌味のない高級感があった。妙に薄暗いがそれ以外は、普通のホテルと大差ない。整骨院の細長いベッドに案内されると思っていたので、戸惑いを隠せない。

「どうしましたか？」

「あ、えっと：なんかイメージと違ってびっくりしてます」

「こういうお部屋はお嫌いですか」

「そういう意味じゃなくて！むしろ、部屋はオシャレなのに落ち着いて、すごく好きです」

「それなら、よかったです」

にっこり微笑むと、倉間さんは「少し準備があるので、お待ちいただけ

ますか」と言い残し、部屋を出て行った。

「はあ…」

緊張を紛らわすように息を吐き、ソファに腰掛けた。お店の雰囲気も、倉間さんの敬語もどうにも慣れない。そわそわした気持ちのまま、改めて部屋を見渡す。

「わっ」

思わず声が漏れた。

なぜなら、ソファに座ったままなのに、浴室が見えたからだ。

「ガラス張りになってる…」

別にガラス張りの浴室なんて、普通のホテルでもある。それにきつと、入浴中は曇りガラスになるだろう。そう分かっているのに、昂った気持ち

で見ると、やけにエッチに見えてしまう。

そんなことを考えていると、ガチャと扉の開く音が響いた。タオルやボトルを持った倉間さんが入ってくる。

「お顔赤くなってますよ、お風呂見つめながら、どんなことを考えてたんですか？」

「え、いや、別に、何にも！」

指摘され、頬に手を当てながら首を振る。

「ふっ：お風呂場でのプレイをご希望ですか：案外エッチなんですね」

「や、ちが！」

耳元でそう囁かれ、ますます顔が火照ってくる。

「可愛いですね。その調子でもっとリラックスしていきましよう」

慣れた様子に、自分はこの人の手の上で転がされているのだと実感した。

「じゃあ、早速始めましょうか。まずは、プレイについて説明します」

倉間さんはソファの前に、片膝をつく。見上げる倉間さんを私は見下ろす体勢になった。

「簡単に言うと、プレイとはD o mがコマンドを使い、S u bがそれを実行する行為です。命令されるとS u bの本能が刺激され、S u bがコマンドに従えば、D o mの支配欲も満たされる。そうやって、互いに欲求を満たし、発散させていきます」

具体的な話を聞いていると、だんだん緊張が強くなってくる。すると、倉間さんが優しく手を握ってくれた。

「大丈夫です。怖いことも、痛いこともしません。今からするのは、気持ちよくて堪らないことだけです。そのために、大事なことを決めないといけません」

「大事なこと？」

「セーフワードです。プレイ中に、どうしても耐えきれなくなった時、その行為はしたくないと感じた時、SubがDomにストップを求める言葉です。何にしますか？」

「なんでもいいんですか？」

「はい。でも、思わず出てしまうような簡単な言葉は避けてください」

「え、えつと…じゃあ、『嫌い』とか？」

咄嗟に思いついた言葉を言うと、倉間さんの目が一瞬見開いた。

「いいですよ。でも、どうしてそれに？」

「え、えっと…倉間さんと一緒にいて、一番言わないだろうなって言葉にしようと思って…変ですか？」

「…」

驚いたように黙り込む倉間さん。

え、変なこと言ったかな？

Subのことも、プレイのことについて基本的なこともわからない。変なことを言っていないか、ずっと不安になってしまう。

「あの、倉間さん…」

「あ、すみません。ちょっとびっくりしちゃいました」

「え、なんで」

「何でって、あなたがあんまり可愛いこと言うからに決まってるじゃないですか」

「か、かわ…ッ！」

さらっとこういうこと言うのは、本当にやめてほしい。倉間さんは仕事なのに、私は馬鹿みたいに意識してしまう。

「顔真っ赤にして可愛いですよ…」

「やめてください…ッ」

手を握る力が強くなる。でも、痛いことはなくて、ぎゅっと握られた手からジンジンと熱が伝わってくる。

「やめません。僕はあなたをいっぱい可愛がって、よしよししてあげたいんです。だから、あなたも僕の言うことちゃんと聞いてくださいね。いい

子にできないと、ご褒美あげられないですから…」

「わかりましたか？」と耳元で囁かれる。

「はいッ…」

艶のある声が、耳を掠め、ゾクゾクしていく。

『Good lady』

「ッ…!」

来た。この感覚。倉間さんに褒められるだけで、体の芯が満たされるような感覚に陥る。

「じゃあ、始めますよ。ここからは本気プレイですからね。あなたは僕のSubで、僕はあなたのDomです。あなたの欲求、全部僕が満たしてあげる…♡」

「あ…ッ」

倉間さんが離れていく。でも、掌の感触も、吐息の熱もまだしつかり残っている。

ああ、どうしよう。この人に、支配されたくて堪らない…！

倉間さんがベッドの端に腰を下ろす。

私は目の前のソファに座ったまま、彼の言葉を待つ。

『e来oいmC』

「ツ…はい…」

彼の放つコマンドはまるで魔法だ。たった一言で、脈が速くなる。その言葉に支配され、その声に縛られたい。

はやる気持ちも抑えて、立ち上がり、倉間さんの前まで向かう。

「はい、よくできました」

たったそれだけで、倉間さんは優しく頭を撫でて褒めてくれる。

嬉しい。気持ちいい。ドキドキする…。

「すごい、もう蕩けてる。コマンド慣れてないからかな。こんな簡単なプレイでそんな顔になっちゃうの？」

「ごめ、んなさい…ッ」

「いいんだよ。いっぱい気持ちよくなってね。君が気持ち良くなればなる

ほど、僕のDomの本能も満たされいくんだから」

「ッ、ほんとですか…?」

「うん、そうだよ。だから、僕の言うことちゃんと聞くんだよ」

「はい…」

「いい子だね♡」

私が答えると、また頭を撫でてくれる。褒めてくれるたびに、下腹部がジンジンと熱を持ち始める。初めての感覚に、意識がふわふわしていく。

「じゃあ、次は君の可愛いところ、全部見せて…『Strip』脱げ」

「ッ…」

Comeよりも恥ずかしいコマンドに一瞬戸惑い、助けを求めるように倉間さんを見つめる。

「だめだよ。そんな目で見ても。ほら、悪い子はお仕置きされちゃうよ？」  
倉間さんの放つ空気に僅かな圧がかかる。

『Strip』脱げ

コマンドが脳に直接響く。足元がグラグラするような衝撃と熱に脳が溶かされていく。

昂ぶりから震える指先になんとか力を込めて、シャツのボタンを外し始める。ブラジャーが露わになり、羞恥に顔を下に向けた。

『Look』見ろ

「え…」

「ちゃんとこっち見て」

ゆっくりと顔をあげると、倉間さんの真っ直ぐな瞳と目が合った。

「ッ…！」

見られてる。自分で服脱いでるところ、倉間さんがじっと見てる…。

恥ずかしいのに、目を逸らすことができない。これがDomからの命令。コマンドが与える快感が全身を駆け巡っていく。

「あ…ふっ…はあ…ッ」

服を脱いでいるだけなのに、どんどん息が上がっていた。ボタンが全部外れたシャツを脱ぎ去り、床に落とす。

「よくできました」

「んう…♡」

コマンドに従い、褒めてもらうたびに、神経が痺れるような高揚感に包まれる。

もつと、もつと…。

従属心がせり上がり、欲望となって心を支配する。

「は、やく…」

触って欲しくて、ついそう漏らしてしまう。

「だめだよ。これは、ただの性行為とは違う。君の行動、感情、思考全てが僕の支配下にある。だから、どれだけおまんこ濡らしても、僕がいいって言うまで、触っちゃだめ。君がもつともつといい子になれば、僕がいいっばい触ってあげる…」

艶っぽい声が脳に響く。彼の声は眠っていたSubの本能をどんどん呼び覚ましていく。

「お返事は？」

「はい…♡」

もう、すでに彼のDomのオーラに身も心も陥落していた。

「いい子だね。じゃあ、全部脱いじゃおうか」

頷いて、私は残りの服を全て脱ぎ去る。もちろん下着も外して、全部床に散りばめていった。

生まれたままの姿で倉間さんの前に立つ私を、彼はじっと見つめてくるが、決して触ってはくれない。

でも、熱い視線が肌を突き刺すたびに、ジクジクした欲望が体の中で渦巻いていた。

「ん…う…」

「おっぱい大きいね。乳首もツンって尖って可愛い…オナニーするとき、

自分で乳首こりこりっつてするの？」

「…うん…」

恥ずかしくて、頷くだけになるが、そんな回答では彼は満足してくれない。  
い。

「ちゃんと言葉で言ってくれないとわからないなあ…」

「オナニーするときは、乳首こりこりっつて弄ってます…ッ♡」

裸でえっちなことを言わされてるのに、興奮が止まらない。彼も私の言動に興奮していることが分かる。

「だから、こんな大きな勃起乳首になっちゃったんだ。他には？」

「え…」

「どうやってオナニーするか、僕に教えて…『Say』言え」

コマンドを使われて、臍の下にぎゅっと力が入った。おまんこからじんわりと愛液が滲み出しているのを感じて、太腿を擦り合わせる。

「乳首、こりこりしながら…おまんこ触ってます…ツ♡」

「おまんこ、どんな風に触るの？」

「ゆ、指で…く、クリトリスを…いじってる…♡」

「指だけ？」

倉間さんの声がねっとりどりと鼓膜を揺らす。

「た、たまに…バイブでも…」

「えっち♡」

「ッ…！」

おまんこがギュッと締まって、奥から愛液が溢れ出す。そんな私を見て、

倉間さんは満足げな顔を浮かべると、手招きして私を呼んだ。

「こっちへおいで。上手に言えた子にはご褒美あげないとね」

動くとき、膺口のぬちゅぬちゅとした感触を余計に感じてしまう。恥ずかしくて、おまんこを隠そうと手を持っていくが、すぐにその手を掴まれる。

「こら、勝手に隠しちゃだめ。言ったよね、全部見せてって」

「ごめんなさい…ッ」

倉間さんは掴んだ腕を引くと、私を自分の膝の上に座らせた。背中を倉間さんの胸に預ける姿勢になり、密着した背中から、彼の鼓動を感じた。

ドキドキしていると、倉間さんの手が後ろから伸びてきて、私の胸を揉み始めた。

「あっ…んう…ッ♡♡」

「ふ…柔らかくて、気持ちいい。ふわふわおっぱい可愛い♡」

「んんう、うう…ッんん♡」

肌に訪れた直接的な刺激に、甘い声が漏れた。全体を下から持ち上げながら、長い指でおっぱいを揉み込まれる。

自分ではできない愛撫の気持ちよさに、腰をくねらせてしまう。

「腰動いてるよ、おっぱい気持ちいい？」

「ん、うん…♡」

口を開けば、あられもない声が出てしまいそうで、指を噛みながら頷くことしかできない。

「噛んじやだめだよ。跡がついちゃうでしょ？ほら、お口開いて。君の

体に跡をつけていいのは、僕だけだから…」

少し低い声が、耳朶を掠めた。求め、自分を縛る声は、首筋に流れ背筋を痺れさせる。

「んんうゝゝッ♡♡」

指を掴まれたので、代わりに唇を噛む。

「こら。唇も噛んじゃだめでしょ」

「だって…声がッ…」

「もっと聞かせてよ。君がいつぱい感じてる声」

舌先が耳を舐める。くちゆくちゅ♡という音が耳の中で反響して、脳が蕩けていく。

「ああ、う♡んんう…ああ♡」

「そうそう。気持ちいいことに身を任せてごらん。ほーら、くちゆくちゅっていっぱい耳なめなめしようね♡」

くちゆくちゅ♡じゅるじゅる♡ちゅ♡ちゅ♡くちゆくちゅ♡

「あっああアア〜ツツ！♡♡んう、ああ、ううう♡♡」

耳を舐めながら、胸を揉む手も止まらない。ビクビクと腰を震えさせ、胸を突き出すと、さらに激しく揉み込まれる。

「ああッ♡うう♡やだ、ッ、だめええ♡♡」

「だめ？ 嘘だよね。ほら、腰動いてるよ。まだ、おまんこ触ってもないのに、腰へコへコしてるの分かるよね♡」

「んな♡んああッ♡ツやあああ…ツツ♡♡だめ、え♡ツああ♡やつ♡んああ〜ツツ！♡♡♡」

指摘されると、余計に感じてしまう。

「気持ちいい時は、気持ちいいって言うんだよ。嘘ついたら、お仕置きだからね。素直に言えたら、ご褒美だよ。君はいい子だからできるよね？」

再び、耳に舌が入り込み、ぐちゅぐちゅと肉厚な舌先が耳のふちを舐める。舌の感触に夢中になっていると、胸にあった指が先端の突起を掠めた。

「あ♡やああ♡ツんんああ〜♡♡♡♡♡」

「ふ…ちよつと当たっただけなのに、すごい声出てる♡ そんなに乳首好きなの？」

「…すき♡あう♡んんう…乳首、すき♡♡♡」

「素直ない子にはご褒美だよ。この可愛い乳首、指でいっぱいこりこりしてあげようね♡」

ご褒美と言う言葉だけで、頭は期待でいっぱいになる。早く触って欲しいとねだるように、乳首がピンッと尖っていた。

「可愛い♡こんなに硬くなってる。ふっ…エッチでいい子だね♡ご褒美だよ、いっぱい気持ちよくなれ…♡」

倉間さんが両胸の乳首を摘む。そのまま、指の腹で押しつぶすように、グニグニと乳首を弄られる。

「もっ♡や、あ♡んあ♡きもちいい♡きもちいい♡♡ちくび、こりこり、きもちいい♡♡ああ♡んんう♡」

待ち望んだ、直接的な刺激に、腰を仰げ反らせた。

いい子だねと褒められて、Subの欲求を刺激されながら、同時に乳首をこりこりと愛撫される。その快感は、今までのオナニーやセックスなん

かとは比べ物にならなかった。

倉間さんは私でさえ知らない、私の本能の欲求を満たしてくれる。

「んあああ♡うんん♡んっあ♡きもちいい♡んんう♡きもちいいよ♡

♡ちくび、きもち、しゅき♡しゅき♡ああッ〜♡♡」

「気持ちいいね。乳首どんどん硬くなって、赤くなってる♡」

「ああ：んんんう♡ああ♡ふ、はッ：くらまさん♡♡」

耳元で響く声と、乳首への絶え間ない刺激。脳が蕩けて、視界が滲んでいく。

「すごい顔、完全に蕩けちゃってる♡ おまんこもまだ触ってないのに、ベタベタになってるよ。気付いてる？ 僕の太腿、君のおまんこ汁で濡れちゃってる♡」

倉間さんが太腿を軽く上下させる。ぐちゅぐちゅとした感覚に、おまんこがぬるついているのが見なくても分かった。

「あああ…ツ♡♡」

「そんなに気持ちいいなら、おまんこ触らなくても、乳首でイクイクできるかなあ？」

「ああッ♡や、で、きないッ…むりい…♡♡」

乳首だけでいったことなんてない。どれだけ気持ちよくても、そこだけでイく感覚なんて分からない。

「無理じゃないよね…？」

「やッ…」

待てという前に、倉間さんの指が二つの乳首をぎゅっと掴む。そのまま、

強く引っ張られて、声にならない喘ぎが溢れた。

『乳首でいくところ、見せろ♡』

コマンドで囁かれ、乳首をこねこね♡される。中指と親指が乳首を摘み、人差し指が突起の先端を引っ搔く。

強烈な快感はダイレクトに膣奥へと響いた。へこへここと腰が動き、じゅわっと愛液が溢れてくる。

「ツんああア〜♡♡♡うあ♡んな♡っや、やあ♡ああッ!♡♡♡きもち♡♡♡きもちいいよおッ!♡♡♡だめええ♡♡♡」

「コマンド出されて、乳首コリコリされて、堪らないね。それが、Subの本能だよ。僕にされてることをもつと意識してごらん。君の乳首をいっぱい虐めて、恥ずかしいコマンドで君を責めてるのは誰？」



ツんんう♡♡」

乳首へのじんじんとした刺激とともに、耳を執拗に舐められる。逃げ場のない快感にびくつと肩が跳ねて、止まらない。

「ああ♡♡ツ、もう、だめえ…イクうう♡♡♡いつちャツ…♡♡♡」

「ちゅ、ぐちゅ…♡♡ツは、ふっ…いいよ、『Cum』」

乳首をぐつと押しつぶされ、同時に耳に歯を立てられる。

「ツああああああア〜♡♡♡」

限界までいった快感が弾けて、腰が跳ねあがり、深い絶頂に達した。

「はあ、ふはツ…あ、ふう…はあはあ…♡♡♡」

初めての乳首イキの余韻で、全身に力が入らない。脱力したまま、倉間さんに体を預けていると、そつと頭を撫でてくれる。

「よくできました♡ 上手にイクイクできてえらいね♡」

「ふ、あは…っ…くらま、さん…ッ♡♡」

絶頂の高揚感とともに、充足感が脳を満たす。

いったばかりなのに、またおまんこの奥が疼いて、とろとろと愛液が滲みだした。

「また、まん汁溢れてきた♡」

「だって…」

乳首イキは気持よかったが、おまんこの疼きが余計に増してしまった。膣奥が切なくて、はやく中をぐちゃぐちゃにかき回してほしくて堪らない。

「ッ…倉間さん…あ…♡」

「おまんこ、切ないの？ じゃあ…」

私が頷くと、倉間さんが私を抱きかかえ、ベッドの真ん中に私を落とし、質のいいシーツに皺が入る。

「乳首イキでとろとろになったおまんこ、見せてごらん…『Present』<sup>晒せ</sup>見下ろす倉間さんの視線が熱く突き刺さる。コマンドを聞いて、膣内をぎゅっと締め付けていた。

もっと、もっと命令してほしい。

もっと、もっと触ってほしい。

満たされたと感じた次の瞬間には乾いて、求めてしまう。与えられれば、与えられるほど、貪欲になる自分がいた。

「あ…ふッ…♡」

両足を広げて、膝を持つ。

あらわなったおまんこは、すでに愛液でびちよびちよになり、太腿までぐっしよりと濡れていた。

「『Goodlady』ははっ、おまんこびちやびちやだね♡可愛いお口がヒクヒクしながら、ちんぽを求めている」

「ああ、ふっ♡んんう、ああ…♡」

「見られて興奮してるの？ どんどんエッチな蜜が溢れてきてるよ♡君のおまんこ、何でぐちよぐちよになってるのかなあ。『Say』言え」

「ッ、ま、まん汁でぐちよぐちよになってる♡♡」

「上手♡そうだね、君の淫乱まん汁で、おまんこぬるぬるになってるね♡」  
卑猥な言葉を言わされて、ゾクゾクとした快感が背筋を駆け抜けてい

った。何も入っていないおまんこをぎゅうぎゅう♡と収縮する。

「ああッ♡んんう、はぁ♡ああ…♡」

「いい子だから、そのまま、足広げてようね…」

倉間さんがベッドに上がり、腰をかがめる。端正な顔が、足の間にやってきて、思わず腰を引いてしまう。

「こら、逃げない。ちゃんとお股ぱつかーんして、おまんこ僕に見せて」

「ああッ…はい♡♡」

「ふっ…とろとろおまんこ、すぐくエッチな匂いがするよ♡まん汁溢れすぎて、糸引いてる♡」

倉間さん指先が、膣口を濡らすまん汁をくちゅ♡と掬い取る。

「見てごらん、僕の指、君のえっちなまん汁で、びちゃびちゃになっちゃ

った♡」

私に濡れた指先を見せつけると、倉間さんはその指を自分の口元へ持っていて。ぱくつと指を咥え、キャンディーを舐めるように、そこに舌を這わせる。

「あ…！」

ぴちゃぴちゃと可愛い音をさせているが、とても子どもには見せられない淫靡な光景だった。

「ちゅ、ツ…：ごちそうさま♡」

「ツんんう…！♡♡」

まるで極上の甘味を味わったかのような顔で倉間さんは笑った。

「そ、んなの…美味しくない…ッ」

恥ずかしさから、思わず言い返してしまう。

「すごく、美味しかったよ。甘くてトロトロで、えっちな君の匂いが口いっぱい広がって、すごく興奮した。だから、もっと欲しいな♡」

「え…」

倉間さんの口が、おまんこに触れそうなほど近くなる。吐息が膣口を掠め、甘い声が漏れた。

「ああッ…♡」

「足、閉じたらお仕置きだからね」

「んんう♡ああア…♡♡」

「まずはクリトリスから。ふっ、まだ触ってないのに、いやらしく勃ってる小さくて可愛いクリ、もっと大きくしてあげるね♡」

「やっ…そこだめえ…っ♡♡」

肉芽を広げられ、クリトリスがピンッと飛び出す。敏感な突起が外気に触れて、震えた。そんなクリトリスを倉間さんは摘むと、ゆっくりと指を動かし始めた。

「ツんああああア〜ッ！♡♡♡うあ♡んな♡っや、やあ♡んああ♡♡♡くりとりす、やだ♡♡♡やだああ〜ッ！！♡♡」

突然のクリ責めは刺激が強すぎて、反射的に体を引いてしまう。

「かわいそうに、いきなりクリシコされたら、気持ちよぎておかしくなっちゃうよね。でも、我慢だよ我慢♡ いっぱいシコシコしたら、クリトリスもっと勃起して、クンニでいっぱい深いキアクメできるからね♡ ほら、シコシコ♡シコシコ♡」

「アああああアア〜ッ！♡♡♡っああ♡んんう♡うあ♡うああッ♡♡  
やああああッ♡♡やだあ♡んああッ〜っあ♡きもち、きもちいい♡  
きもちよしゆぎるう♡♡」

加減のないクリシコに叫びのような嬌声が漏れて、腰が仰け反る。

それでも、倉間さんは笑顔でクリトリスをいじめ続ける。小さな突起を指先で擦り上げて、押しつぶす。

グニグニ♡シコシコ♡グニグニ♡シコシコ♡きゅッ♡きゅッ♡

シコシコ♡じゅッ♡じゅッ♡シコシコ♡じゅッ♡じゅッ♡

「ツひぐううう〜ッ！♡♡ああッ♡っらめえええ！♡♡だめええ♡♡つよしゆぎい♡クリシコ、つよいッ♡♡だめえ♡♡」

力が入らなくて、膝を落としそうになるが、その度に「閉じたらお仕置

「きだよ」と悪魔のような言葉が降ってくる。